

---

# 死小説

高木希土

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死小説

### 【Nコード】

N8097N

### 【作者名】

高木希士

### 【あらすじ】

ちよっとおかしな、ある男の話です。

ある晴れた日の話である。しかし、天気が晴れたからといってそこに生きる人間の心まで晴れるなんてのは恐るべき勘違いだ。そう、特にこれから自殺なんかしようとしている彼はそのいい例だ。

彼、中山翔次にとって晴天というのは雨でも雪でも曇りでもないという意味でしかない。したがって、部屋の大きな窓から差す陽光も彼に何の感動も与えない。

ただ、一つだけ彼が今日の天気について思うことがあるとすれば、昨日の大半を費やして書き上げた遺書が雨に濡れないという点での安心だろうか。

前述のとおり、翔次は現代に数多くはびこる自殺志願者のひとりである。彼がそうなった理由を端的に表すのなら、「人生に疲れた」といったところだろうか。仕事や人間関係といったやや具体的なものに疲れたのではなく、生そのものの疲弊が彼を死へと走らせている。そもそも、彼は無職で家からあまり出ることもない。仕事やら人間関係に疲れるような環境にないのだ。しかし、そうなるのであればどうやって生計を立てているのだろうか。

これはあまりに簡単な話で、誰かに養ってもらっているのである。誰に養ってもらっているかで「親のすねかじり」や、「ヒモ」という蔑称を世間から頂けるわけだが、彼の場合は後者であった。

しかし、無論彼はそう呼ばれるのを嫌い、自らを「小説家」だと思っている。だが、彼はあくまで小説家を志しているだけで何の結果も残していない。残っているのは、様々な賞に落選した作品の山だ。だが、そんな状況ですら、ただ日々を小説を書くことに費やしている以上、彼の日常は彼と同じ二十七歳の勤労する社会人のそれよりずっと楽だろう。そんな彼が「人生に疲れた」などというのは他人からすれば怒りを通り越して呆れる、いやそれすらも一周してまた怒りに戻るほど甘えたものだ。

勿論、彼は自分が甘えているのを重々承知している。だからこそ、そんな甘えている自分が生きていることが許せない。彼は自分がこの世に生きる命の中で最も卑しいものであると自覚している。一向に芽の出ない小説を書くばかりで働きもせず、恋人に養われ、まるで薄汚い寄生虫のようである自分が許せない。いや、生きることすら放棄しようとしているのだから、寄生虫にも劣る下衆の中の下衆だと彼は確信している。

だが、彼が一番許せないのはそんな生き方を変えようとしないうち、自分の臆病さであつた。

ここまで考えた故の結論である。自分は死ぬしかない。その時の彼には揺らぎなどなかった。

彼は折りたたんだ昨日の成果　すなわち小説家としての最後の作品とも呼べる遺書　を携えて自分の部屋を勇ましく出て行つた。そして、玄関の前に立ち、ドアノブに手をかけ扉を開ける

いや、扉が開いた。

彼の目の前に飛び込んできたのは長髪の可愛らしい女性だった。ワンピースを着て、手には食料品の入ったビニール袋を二つばかり持っている。買い物帰りであることは明らかだった。

お互い、驚いた表情で一瞬凍りついたように見つめあつた。

「びっくりするじゃない」

彼女がそう言ったのは鉢合わせしてから一拍間を置いた後だったから、言葉ほど驚いてはいなかった。

翔次は偶然を操つてほくそ笑む存在なぞが居るのなら今すぐ殴つてやりたいと思った。まさか、よりにもよつて。そもそも、玄関で鉢合わせするなど彼女以外あり得ないので、この場合彼が後悔するのはタイミングであつた。

デザイナーとして彼を扶養する、この家の大黒柱にして支配者、<sup>ぜんまいらんか</sup>薇欄花と鉢合わせしたのを彼は激しく後悔していた。恋人と鉢合わせするのを後悔するほど二人の関係は冷めているわけでもなかったが、タイミングが悪すぎた。しかし、彼は精一杯落ち着いて対応す

る。

「それはこっちも同じだよ」

「どこに行くの？」

彼女の口調はやや追求するような印象だ。彼女はこのまま玄関で会話する気らしい。

「手紙を出しに行こうと思つてね」

翔次は出来る限り冷静を装いながら、あらかじめ考えていたごまかしのパターンの一つを使用する。「備えあれば憂いなし」と彼は内心ほくそ笑んでいた。

「へえ、封筒にも入れないでポストに出すのね」

彼女のあまりに的確な返答に翔次は一瞬焦るが、気を取り直して別のパターンを使用する。

「……いや、我楽多のところに届けに行くんだ。ほら、昔の手紙のやり取りを再現してるんだよ。平安時代とかその辺の。今、俺たちの間で流行ってるんだ」

焦りながらも、数少ない友人の名前を登場させて説得力を増す。

「ふうん、古風で良いじゃない」

「だろ？」

「じゃあ、俺行つてくるから……」

翔次はそのまま外に出ようとしたが出れなかった。

なぜなら、彼女という大きな障害があったからだ。もう顔が笑っていないかった。

「それ以上嘘を吐くと、貴方から『昼食』って概念が消えるわよ」

「餓死できるなら本望だ」

翔次はそう答えた。もうごまかしに意味はなく、論破するしかない判断したようだ。

「また、死にたいと思つてるの？」

彼女はため息をつきながら、悲しみと呆れの混じった顔でそう言った。

彼女にとって、こういうやり取りは最早恒例行事のようであった。

彼が死にたいと言う度にそれを止める。そしてまた彼は小説家を目指す……。

そんなおかしなイベントにいい加減彼女は飽き飽きしていたのだった。その気持ちは日増しに強くなり、ついには呆れと悲しみが彼女の中で緋い交ぜになってしまったのだった。

「いつまでも生き恥をさらしてられるほど、俺は馬鹿じゃない」  
そんなことには全く気付かず、翔次はお決まりの理論を振りかざす。

「生き恥を晒すのが嫌なら、働けばいいじゃない」

「どこの会社が、二十七の職歴なしを雇うんだよ」

「じゃあ、意地でも小説家になりなさいよ」

そう言いながら、彼女の中で呆れが怒りに還元されてゆく。

「俺には才能が無いんだよ！いくらやる気があつたって、才能がないモノにならないんだよ」

「ああ、もう！ うだうだ言っでないで、覚悟を決めたらどうなの！」

ついに彼女は怒鳴った。

「死ぬなんて、逃げてるだけでしょうが！ 死んで何の意味があるのよ！ これだけ言われて、まだ分からないの？」

「俺の気持ちがお前なんかに分かるか！ 惨めだったらしく、独りで小説書いてる奴の気持ち分かるか！」

「そんなの、分かるわけないでしょ！」

「いいわよ、勝手にすればいいでしょうが！ どうぞ。」

彼女は恭しく翔次に道を譲って、自らはさっさと家の中に入って行った。

「言われなくてもそうするよ！」

翔次もまた投げやりにそう返した。

「その代わり、夕食もなしよ。」

「死んだ奴が飯なんか食べるか。」

去り際にそう言っで、翔次は家を出て行った。

少々邪魔は入ったもののこれでようやく死ぬことができると、翔次は半ば安堵していた。これ以上の邪魔などもう入らぬと高を括っていた。

部屋の中ではなく外で浴びる日差しを翔次は暑いと感じた。彼の扶養者もまた、その暑さゆえに晴れた日が嫌いだ。彼は彼女のように天気を嫌悪する感覚など持ち合わせていなかったから、それを聞いたときにはひどく不思議に思ったものだ。

そもそも、そんな頭の螺子が緩んでいるような感覚しか持ち合わせていない彼女があつた。魑魅魍魎が跋扈し、勝手な常識が支配している社会に適応しているのが彼には疑問だった。さらに言えば、そんな者が山のようにいて、今自分と同じように生きていることが彼には謎であつた。

しかし、だからこそ彼は彼女や友人の我楽多文がらくたふみすら社会に適応できているのに、それができない自分がこの上なく情けなく思えるのだった。

そんなことを考えたからだろうか。

「やあ、翔次」

後方からの突然の声に翔次は驚いて振り向く。しかし、相手は見ればすぐに分かった。

「やあ、我楽多」

翔次は友人に挨拶をした。我楽多はその気さくな印象そのままに少しだけ笑っていた。我楽多はフリーライターである。翔次とは大学時代に意気投合し、それから付き合いがずっと続いている。我楽多は翔次と同じように、自らの筆で生計を立てようという人種ではあるが、翔次との違いはそこに仕事があることだ。つまり、現実的生計が成り立っているというわけである。

「欄花さんは元気かい？」

我楽多の問いに翔次は先程のやり取りを思い出し、一瞬困ってしまつたのだが、

「相変わらず、口の減らない元気な女だよ」

と、事実を偽らずに若干の嘘を吐いた。そんな翔次の一瞬の葛藤も知らずに我楽多は笑った。

「はは、それは良かった。で、その手に持つてるものは何だ？」

我楽多はそう言って、翔次が手に持っていた遺書を指さす。翔次は一度ならず二度までも彼の何気ない質問に困らされてしまった。しかし、困っているだけではますます追い詰められてしまう。翔次は急いで答えを捻った。

「……小説の原稿さ」

なるべく安定した口調で言ったが、差し出された手とともにすぐさま次の課題が飛んできた。

「じゃあ、見せてくれよ」

二人が意気投合したのは互いの才能を認め合う故のものだったが、それが今は裏目に出ている格好だ。

「いや、今は急いでるからさ」

「とか何とか言って本当は見せるのが怖いんじゃないのか？」

「いや、今度見せるからさ。今日は勘弁してくれ。じゃあな！」

そんな安い挑発に乗るほどバカではない、と言わんばかりに翔次は走ってその場を去った。

目的を早く果たしたいから逃げたのか。それとも我楽多の言葉が凶星だったから逃げたのか。どちらなのかは、翔次自身にも分からなかった。

翔次が初めて死のうとしたのは小学生の頃だった。その時にいじめを受けていて、死んだ方が楽だと思っていた。今より理由は遥かに単純だが根本的な部分は何一つ変わっていない。

その時の手段は自殺とも呼べぬほどの幼稚さであったが、恐怖に負けて自殺を止めたことはよく覚えている。それからというもの、社会や周りの環境への適応が苦痛になる度に死のうとした。

しかし、彼が今ここに存在しているのはそのどれもが失敗に終わ



ったことを示している。原因は二つだ。彼女が止めるか。自分でやめるか。

今日は既に前者を突破した。覚悟もできている以上、後者も間もなく突破できるだろう。散々邪魔が入ったが、ついに自分は死ぬのだ。

彼は、今はもう使われなくなったビルの屋上へと階段を一段ずつ上っていく。それは一歩一歩死に近づいていくことと同義であった。ここまで書けば、彼の自殺方法は火を見るよりも明らかだ。

「飛び降りる」。つまりは落下死。比較的ポピュラーな自殺方法である。だが、彼はこの方法を試したことが無かった。それは彼にとっては盲点だったが、ポピュラーがポピュラーたる所以に気付けばなんてことはない。要は誰にでも出来るのだ。覚悟さえできれば万人に通ずる方法である。だからこそそのポピュラーなのだ。

幸い、このビルに入ってからというもの、ここに来るまでの道のりに比べ邪魔らしい邪魔はまったくない。運命が最後の最後に自分の味方となってくれたことに翔次は感動すら覚えていた。

ついに、彼は屋上まで辿り着いた。

彼はフェンスの前に持っていた遺書を置き、フェンスをよじ登って小さな足場に出た。もう靴の前半分が足場に乘っていないかった。ここまで彼には覚悟があったのだ。

「高い……」

思わず下を見下ろして、そう呟いた。そのまま、「怖い」と続けてしまいそうだった。

既に彼の足はすくんでいた。もう自分の体ではないかのように一切動かなくなってしまった。

あの思考はなんだったのか。あれは簡単な結論ではなかったはずだ。複雑な思考整理を経て出た、絶対の答えだったはずだ。あとはそれを実行するだけなのだ。自分は正しいのだ。翔次はひたすらにそう自分に言い聞かせていたが、それでも足が動かないと分かれると、「翔次の翔は何のためだ！　ここから飛ぶためだろう！」

自分を鼓舞してみたが、足はぴくりとも動かない。

ついに、彼は高さという本能を揺さぶる恐怖に負けた。

彼が家に帰る頃には、もう夜になっていた。

落ち込みながらもどこか吹っ切れたような顔をしている彼の前の食卓に皿を並べながら、彼女が尋ねる。

「で、これからどうするの？」

「俺、働くよ。頑張つて働くよ」

そんな彼の前向きな答えに、彼女は満足げに笑いながら、

「じゃあこれ」

近くの棚から雑誌を取って彼に渡した。

「これは……」

求人情報誌だった。善は急げという彼女なりのメッセージでもあった。

「それを読んで、仕事を探してね」

彼女の笑顔が、彼にとっては何よりの激励だった。

「分かった、夕食を食べてからやるよ」

「何を言ってるの？ これは私の分よ」

「は？」

彼は何事か分からず茫然としてしまった。彼女は彼女で笑顔の種類がシニカルなものに変わっていた。

「さつき、家を出るときに言っただでしょ？ 夕食は無しって」

「……この悪魔」

彼は小さく毒づいた。

彼はほんの少しだけ死んでおけばよかったと思ったが、口には出さなかった。

これが中山翔次と薇欄花という、異常なカップルの異常な日常であつた。

希望を拾って歩きだして、しばらくすると恐怖で進めなくなつて

絶望する。そしてまた希望を。その繰り返しこそが彼と彼女の日常だった。

中山翔次がまた自殺を考えだすのはこの日から一週間後であった。

（後書き）

自分の経験を基にした私小説です。気に入っていただけたでしょうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8097n/>

---

死小説

2010年10月8日14時13分発行